くるをいふ詞也、今も風便など音にいへり、河圖帝通記に、風天地使也と見えたり、

〔倭訓栞前編十一〕ゑなどのかせ　中臣祓にみゆ、源氏にそのよのつみは、みなゑなとのかせにたぐへてなどいへり、神代紀に級長津級長戸邊を風神といへり、口訣に颯颯云級長と見えたり、颯颯は野分の風也といへり、又乾風をいふといへり、

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓

科戸之風乃、天之八重雲乎吹放事之如久、○下略

〔源氏物語二十朝顔〕なべて世の哀ばかりをとふからにちかひしこと、神やいさめん、とあれば、あな心う、そのよのつみはみなゑなどの風に、たぐへてきとの給あひぎやうもこよなし、

〔八雲御抄三上天象〕風　神風いせの國、信卿の説、經春秋はつ　あまつ　夜夕朝一万　山野浦濱河浪　ゑま　たに　松　ゑほ　をひ　うは　ゑた　よこ　おき後拾、長能歌也、は羽葉清輔抄南雪ゆきとへり　あま　ゑなと　ありそ　ときつ万　うしほ万　みなと　いるかせ家風也山ゑた　のせ清輔抄　北冬同　こち東風也、あさこち、只こちともいへり、あなしいぬゐ也　ひかた日方ひつじさる、後頼抄巽風也、範兼はこちの風のふきやまぬなり、　をきつ　はやち海神のふかする風也　あゆ東の風とかけり、是家持が越中守時作歌也、是北陸道詞也、いかほ　こからし秋冬　山おろし　河おろしさよふけてとよめり　山こし　うらこしあはれなかぜなり野分　ゑのゝをふき　まかせ　くすのうら　ゑなとの　ゑまなびく後頼抄　あらしまかせいたま万　あすかかせ　はつせ風　さほかせ已上三は所名也、万にあり、風ともいはで山おろし吹ともいへり、風まつりといふは、社などに風なふかせそと申也、又万葉になみおそろしと、かせまもりとよめる、これ舟事なり、こがらしは秋冬風木枯なり、但こがらしの秋のはつ風ともよめり、野宮歌合に、正通冬物と難て閉口畢、こゝろあひのかせ　わいたやまし　きたこち、これらも風名也、をしやな巽風、清輔抄、谷風にとくる氷は、是毛詩心也、謂東風云々、尤氷可解風也、但作春